

21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部
発行者：大迫 健一
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当
〒171-0011 東京都豊島区目白2-1-1
URL <http://www.21water.jp/>
E-mail info@21water.jp

創刊号 2008年7月9日号

発刊にあたって

理事長 大迫 健一

21世紀水倶楽部は発足して5年を経過しました。この間、会員の相互の意志疎通には年1回の総会があります。そのほかシンポジウムやメールを通して意見の交換をおこなっています。



会員の個々の期待が十分に倶楽部の目標や運営に反映されていないとの意見もあります。そこで「21世紀水倶楽部だより」を情報交換の場として広報し会員の皆さんの主体的な参加によりその内容を編成していきたいと思えます。

積極的な意見や提案の投稿をいただき、すみやかに会員の皆さんに伝え相互理解に繋がるよう心がけていきます。会員の期待に沿う21世紀水倶楽部を育てていきましょう。

2008年度総会報告

理事・事務局長 中川 幸男

今年で、5回目となる通常総会が、6月11日に(財)下水道新技術推進機構の会議室において開催された。

議長および議事録署名人に、それぞれ大迫健一氏および清水治氏、二宮毅氏が選任された。

議長のもと議案の審議に入った。

第1号議案は、平成19年度の事業報告、会計収支報告、監査報告である。

第2号議案は、平成20年度の事業計画、収支予算である。審議の結果、第1号議案及び第2号議案は、原案どおり可決された。

議案の審議に関連して、3つの意見が会員から出され、意見交換がされた。

セミナーに参加申込みをしたが、定員に達したため断られた。会員外よりも会員を優先すべきではないか。会員外からは参加費を徴収して、多人数収容可能な会場にすべきだ。

次年度繰越金が多額になっている。年会費を減額すべきではないか。

収益事業を積極的に行い、NPO活動を活発化すべきではないか。



総会での熱心な審議状況

総会の後、講演会が催された。

講師は、栗田 彰氏（NPO下水道文化研究会・評議員）を迎え、演題は「江戸の川あるき」であった。

栗田氏は、東京都下水道局OBであり、長年にわたって、江戸の川と下水道に関して、足で集めた貴重な情報をまとめ考察されたものであった。

講演会の後、懇親会が開かれた。ゲストに国交省下水道部から井上茂治氏（流域下水道計画調整官）を迎え、しばしの歓談の時を過ごした。

2008 年度活動報告

今、世界の下水道界で最もホットな技術

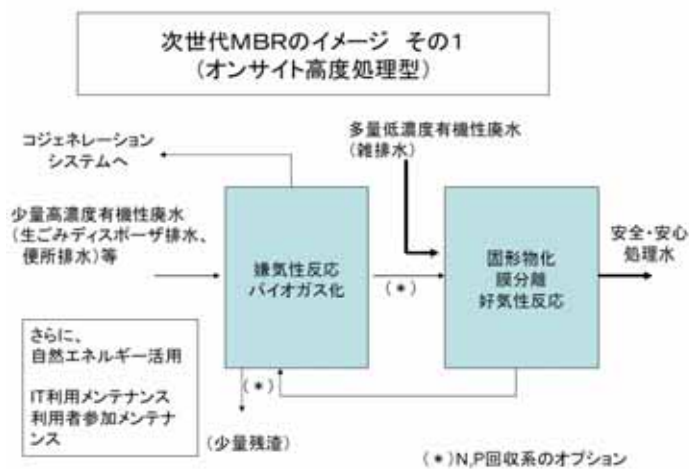
MBR のシンポジウムを開催

理事 二宮 毅

当倶楽部では、平成 20 年度に入り普及啓発活動の一環として、4 月 5 月と 2 度にわたり研究集会を実施してきた。そして、引き続き第 3 弾として 6 月 16 日には、世界的に今最も注目を集める水処理技術、膜処理 (MBR) に焦点を充てたシンポジウム「膜処理技術と水リサイクル - どのようにリサイクルするのか - 」を開催した。

講師に、MBR 研究では世界の最先端を行く 3 人の先生方、東京大学の山本教授、高知工科大学の村上教授、日本下水道事業団の村上部長をお迎えでき、下水道新技術推進機構の会場は、定員を大幅に超える盛況となった。

最初の講演「膜処理技術の動向」(山本教授)では、次世代型 MBR (イメージ図参照) の活用により目指すべき持続可能な社会像を実現できるとのスケールの大きい話に強く印象づけられた。



続いて「総合的水資源管理技術と膜処理水循環利用」(村上教授)、「わが国の MBR 導入状況と欧州の MBR 標準化の動向」(村上部長)と御講演頂き、それぞれ、膜処理による水循環利用の事例、今後のわが国での MBR 普及の可能性、等について、大変に興味深い話を聞くことができた。

総合討論でも、「有効性」に始まり、MBR による「工水への再利用」、「都市地下水の涵養」、流域下水道論にも繋がる「分散と集中論議」、「わが国で始めて分散型下水道を可能にするツール」、「次世代型 MBR」等等、色々な分野の方からの活発な質疑が飛び交った。そして悼尾には「水の安全保障会議」

の話も飛び出すなど、内容の濃い大変な熱気(会場も満員であったが)に包まれたシンポであった。

最後に個人的感想を言わせて貰えば、「MBR の持つ潜在的技術的可能性・有用性に瞠目させられた」一日であったという感じである。(会議内容・議事録は現在取り纏め中であり、終わり次第、当倶楽部 HP に掲載することとしている。)

春の研究集会「下水道事業と地域活動」報告

(1) 千葉市、横須賀市の事例

理事 亀田 泰武

2008 年 4 月 24 日に開催された研究集会を二回に分けて紹介します。

下水道は家庭生活に密接につながっていますが、一般市民との接触はあまり多くありません。大部分の施設が地中にあることや、下水という性格上、接点が難しい面を持っていることに由来すると考えられます。都市の重要な水環境保全施設であるという認識が薄くなっているようです。

下水道事業を広く一般に理解していただいて、その姿、財政、費用など理解を得るとともに市民に望まれる水循環施設にしていく必要があります。そのための出発点をどう探っていくか。この点について先進の事業者で担当された方、地域活動団体の方、に市民とどう協調し地域と下水道事業を結びつけてきたかお話しいただき、今後の参考にさせていただくという企画です。下水道界で公共団体と協働されている市民の方々にお話しいただく初めての会となりました。

まず、千葉市こてはし台団地の調整池水辺づくりについて千葉市下水道局土屋建設部長と千葉市服部エコリーダーから紹介がありました。



ビオトープ工事中のこてはし台調整池

千葉市には市街地開発に伴う多数の雨水調整池があります。都市化によって自然がなくなりつつある状況から、千葉市では平成 15 年に「千葉市

水辺再生プラン」を策定。このプランに基づき、千葉大学、地元自治会、小学校、下水道局で構成される「こてはし台調

「調整池水辺づくり協議会」の活動がはじまり、施設内容、管理、地元の要望、などを協議して、地元の小学生の現地見学会で、子供達から夢を描いてもらい、それをもとに設計がおこなわれました。施設は19年度、20年度の2年で建設。

この過程で重要な役割をされたのが全くのボランティアで調整池内にビオトープを整備した服部エコリーダーでした。下水道局から調整池使用の許可を得てビオトープ作りをされ、これが直立護岸で雑草が生い茂り、全く近寄りがたく、長らく放置されてきた調整池での水辺づくりの動きを加速し、関係者に自信を持たせたように感じます。やっとできあがった池にドジョウやタナゴを入れたところ次の日にはサギやカワセミが飛来したとのこと。

次に横須賀市上下水道局施設部の森山水再生課長が、下水処理場に設置された「トンボの王国」の現状と課題を説明されました。

2カ所の下水処理場で市民のためにトンボの王国をつくったもの



トンボの王国 下町浄化センター

です。下町浄化センターの一角でトンボの王国を作りトンボや三浦メダカを放したところ白鷺が来てメダカを食べてしまったり、またザリガニや熱帯魚が持ち込まれたことがあるなど管理者としての問題が数々あるようです。

また東京ガスの発電所向けに高度処理した水の供給プロジェクトのお話もありました。

詳細は<http://www.21water.jp/k1/2008sp1/>

(東京清瀬と川崎の事例は次回に)

2007年度活動報告

「発展途上国への下水道整備」で研究集会

実態を踏まえた提案相次ぐ

理事 亀田 泰武

2007年5月25日、東京・千代田区の日本水道会館において、「発展途上国の下水道整備手法はどうあるべきか 日本の経験から」と題する研究集会を開催しました。

この研究集会では、日本下水道事業団の堀江信之関東・北陸総合事務所所長が「途上国の下水道整備手法」、(株)エヌジェーエス・コンサルタンツの木口孝文執行役員地球環境部部長が「各国における下水道施設の現状および下水道整備の事例報告」、亀田が「下水道整備の基本方針のあり方」についてそれぞれ話題提供を行い、その後に参加者約30名を交えて討議を行いました。

堀江所長はわが国による途上国の整備目的に触れ、名目としては国際貢献が挙げられるが、実体論として日本が世界にどのように関わっていくかが問われることを強調しました。また、「途上国に行った途端にあらゆる問題が押し寄せてくる」現状を伝えました。そのうえで、「日本の常識を一旦忘れて大胆な発想で取り組まなければならない」とし、「管径は小さく、浅埋設で、マンホールは設置せず、トイレは固形分を除き、できるだけ液体のみを排水する」手法などを提案しました。

また、木口部長は、ジンバブエやレバノン、モンゴル、マレーシアなど6カ国における下水道施設の実態や同社の取り組みなどを紹介しましたが、そのほとんどで維持管理がなされていない実態を踏まえ、発展途上国の下水道整備においては、セプティックタンク（腐敗槽）の汚泥の引き抜きは定期的実施されるのか、その処理・処分先は確保されているのか、将来における下水道整備の予算は確保できるのか、などの懸念事項を指摘しました。

亀田は、わが国における下水道面整備の高コストや市街地税制の問題点を洗い出し、戦後、土地の公共目的の制約が薄くなったこと、固定資産税が安すぎて地価上昇の莫大な利益の大部分が、資産価値を上げたインフラ整備の財源にならず、土地所有者へ流れたことなど、日本の公共投資を反省し、それらを考慮したうえで、発展途上国の下水道整備政策ポイントとして、宅地開発時の下水道整備を最優先とすること、降雨量が多い大都市地域での合流式下水道の優位性、処理施設の先行整備方式等の検討などを挙げました。

編集幹事のあと整理

四月の創刊準備号を経て、今回、創刊号をお届けすることができました。

本「たより」は当会の活動情報の一端を紹介するものです。詳細をお知りになりたい方はホームページをご覧ください。

<http://www.21water.jp/21index.htm> >会の事業予定(結果)の「結果」からシンポジウムなどの詳細情報をご覧いただけます。

中川事務局長から通常総会のご報告をいただきました。総会では議事そのものはご了承いただきましたが、会の活動について活発な意見交換がなされました。「発刊にあたって」の理事長文の「会員の個々の期待が十分に倶楽部の目標や運営に反映されていないとの意見もあります」はその点もふまえた文章かと思います。

広報担当としては、会員の皆様の意見をさらに反映するために、この「たより」を発展させていくことと、ホームページにそのためのスペースを設けるため準備中です。会員の皆様のご意見と活動が会を支える基本ですので、「たより」への積極的な参加とホームページを通じた情報交換をお願いします。

編集幹事・望月